義太夫雜誌

# 太棹

文樂研究特輯號

第六拾六號

東京 太棹社 發行

# 本社主催義太夫會出演諸氏回數表

## 東都義太夫會（身振劇入）

自第四十七回＝至第六十一回（俳號イロハ順）

| 氏名 | 數 |
|---|---|
| いろは氏 | 五 |
| 一井鳳氏 | 一 |
| 圓孝氏 | 一 |
| 呂六氏 | 一 |
| 春州氏 | 三 |
| 巴和氏 | 一 |
| 二常氏 | 一 |
| 北樂氏 | 二 |
| 平斗氏 | 二 |
| 登和氏 | 一 |
| 都昇氏 | 一 |
| 千鶴氏 | 一 |
| 長平氏 | 四 |
| 里芳氏 | 四 |
| 柳蝶氏 | 一 |
| 若尾氏 | 一 |
| 和舟氏 | 三 |
| 辰寿氏 | 一 |
| かな | 一 |
| 可嘉 | 四 |
| 大津氏 | 一 |
| 辰松氏 | 一 |
| 嘉め氏 | 三 |
| 稻津氏 | 一 |
| 清其氏 | 二 |
| 榮杉氏 | 一 |
| 三三氏 | 一 |
| 旭天氏 | 一 |
| 天天氏 | 一 |
| 寿紅氏 | 一 |
| 越福氏 | 一 |
| 福福氏 | 二 |
| まや | 一 |
| つま | 二 |
| 吳う | 一 |
| 鞦武氏 | 一 |
| 武な | 三 |
| 素が | 一 |
| 市遊氏 | 一 |
| 藏瀞氏 | 一 |
| 羽ぼ氏 | 二 |
| と氏 | 一 |
| ばと氏 | 二 |
| 勝氏 | 一 |
| 笑氏 | 六 |
| 巴氏 | 一 |
| 司氏 | 二 |
| 賞氏 | 一 |
| 昇氏 | 四 |
| 幸氏 | 二 |
| 樂氏 | 一 |
| 鳳氏 | 三 |
| 市氏 | 二 |
| 錦志氏 | 四 |
| 銀鶴氏 | 一 |
| 銀喜氏 | 一 |
| 中水氏 | 一 |
| 野司氏 | 一 |
| 清子氏 | 七 |
| 操氏 | 一 |
| 美昇氏 | 三 |
| 美玉氏 | 二 |
| 美笑氏 | 一 |
| 未成氏 | 一 |
| 三由氏 | 一 |
| 松樂氏 | 五 |
| 松猿氏 | 一 |
| 松雨氏 | 三 |
| 松花氏 | 一 |
| 寿樂氏 | 二 |
| 秀峰氏 | 一 |
| 一重氏 | 三 |
| 近江清華氏 | 三 |
| 湯原清司氏 | 六 |
| 翠谷氏 | 一 |

## 淨曲振興會

自第一回＝至第九回（俳號イロハ順）

| 氏名 | 數 |
|---|---|
| 井筒氏 | 一 |
| 圓六氏 | 二 |
| いは氏 | 三 |
| 巴常氏 | 四 |
| どろく氏 | 二 |
| 都烏氏 | 一 |
| 都昇氏 | 六 |
| 長平氏 | 二 |
| 千晴氏 | 二 |
| 柳蝶氏 | 一 |
| 叶氏 | 一 |
| かな | 一 |
| 大嘉 | 三 |
| つば | 二 |
| め津氏 | 一 |
| め氏 | 一 |
| のまつぼ | 一 |
| 福氏 | 七 |
| 寿勝氏 | 二 |
| 越氏 | 四 |
| 國氏 | 一 |
| 語巴氏 | 一 |
| 三氏 | 一 |
| 天聲氏 | 一 |
| 杉氏 | 一 |
| 朝松氏 | 一 |
| 清幸氏 | 一 |
| 銀昇氏 | 七 |
| 司鳳氏 | 一 |
| 章氏 | 一 |
| 清氏 | 一 |
| 其甫氏 | 一 |
| 美氏 | 一 |
| 操玉氏 | 一 |
| 未氏 | 一 |
| 松成氏 | 一 |
| 秋樂氏 | 二 |
| 寿華氏 | 一 |
| 清樂氏 | 二 |
| 清司氏 | 二 |
| 盛華氏 | 一 |
| 隅鶴氏 | 一 |
| 斗氏 | 一 |

## ◇東都義太夫會（身振劇入）

▼第六十二回七月廿三・廿四日（松屋ホール）

## ◇淨曲振興會（素淨瑠璃）

▼第拾回七月廿九日（白木屋ホール）

# 東都五十義會春季大會大關旗受領並に入賞祝賀會

向て左より＝梅本香伯・鈴木松寶・栗原千鶴・片山つばめ・伊藤松鶴
松尾武市・柴野筑波・梅本夫人・平井榮の諸氏
中列左より＝岩田未成・的野關路・倉田登喜和・野澤道之助・和田春和
小松瓢六・竹本伊達子・梅本夫人令妹・的野夫人の諸氏

後列左より＝國友東光・保谷紅司・佐野美昇・伊藤松猿・豊澤猿三郎
細川清・清水清司・竹本殿母太夫・竹本時之助・竹本越道・加島屋・鶴
澤彌榮吉・豊澤雷糸・竹本津彌太夫・岩場信哉の諸氏

大森松淺本店にて（記事參照）

# 秋本雲雀追善義太夫大會

前列向て右より＝井上和風・黒川　叶・秋本ひばり・神馬里芳・中野吳羽の諸氏

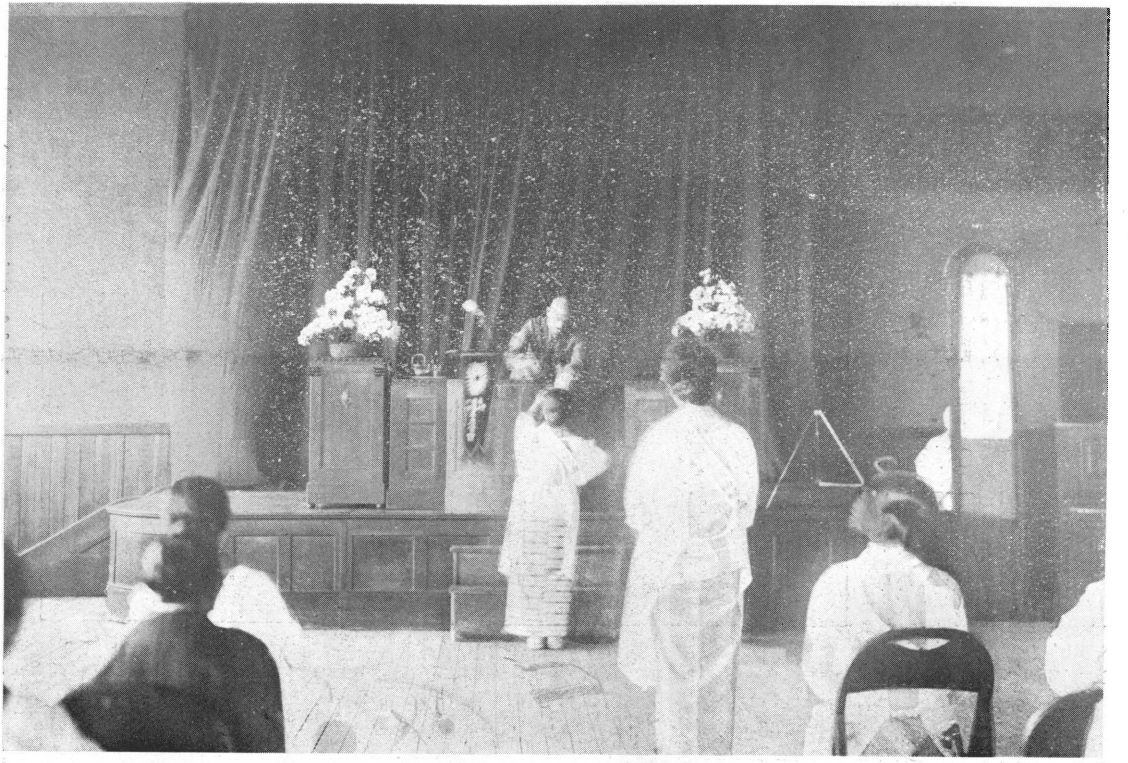
後列同右より＝玉井松樂・莊　喜聲・堀　ときわ・山田壽瓢・本城冠之竹内たもつ・吉川浪補の諸氏・外床世話・秋孝・謙治・千島・いさみ

（並木倶樂部にて）

# 大日本國防婦人會深川支部

## 平久分會發會式・會長神馬里芳女史

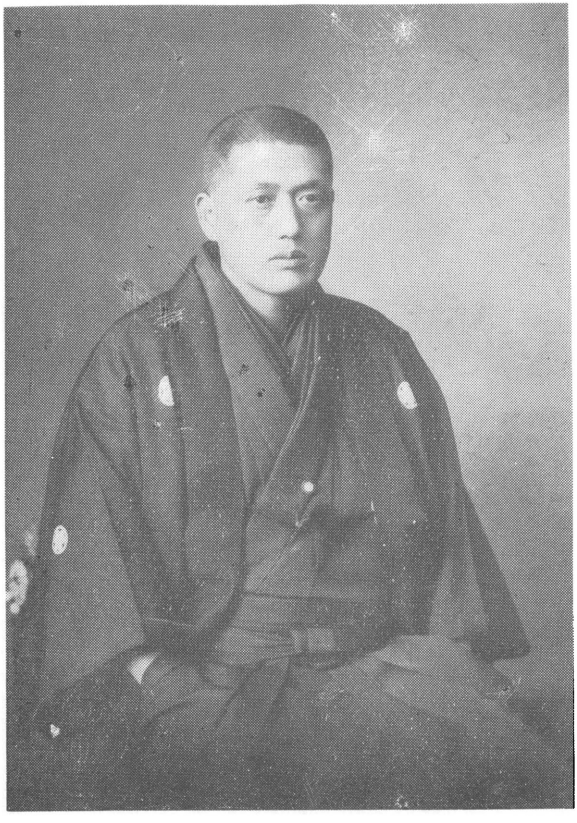
大日本國防婦人會深川支部平久分會は、各方面の絶大な援助に依り、六月十六日午後一時より平久町平久小學校に於て、その發會式が盛大に擧行されました。



會長には我が神馬里芳女史が推されましたが、女史は凡てを昨年逝去された令息の未亡人ふみ子さんに一任され、若き未亡人は母堂に代つて同會の爲め盡粹されました。此寫眞はふみ子未亡人が分會旗を奉戴さるゝ處であります。

# ◆目出度歸朝の◆

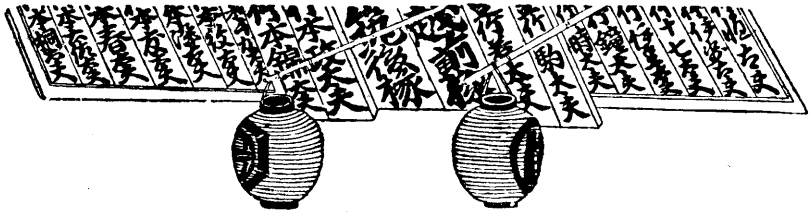
# ◆豐澤仙十郎師◆



在米邦人の招聘に依り、豐澤仙十郎師が義太夫教授に渡米されましたのは昨年三月十五日でありました。

同師はロスアンゼルスに在て同好の士に教授する事一年有餘、努力專心、絶大の功績をあげて去る十九日目出度歸朝されました。

五月廿五、廿六の兩夜、同市の大師教會堂に開かれた送別義太夫會は頗る盛會を極め、着京當日の東京驛頭は、歡迎の小旗を翳して押し寄せた玄素の人々を以て埋められました。



（昭和十年六月廿七日）　太　棹　（毎月一回發行）

◆◆◆第六拾六號◆◆◆

◇寫眞　五十義會大關旗授領並に入賞祝賀會●秋本雲雀追善義太夫會●國防婦人會深川支部平久分會發會式●歸朝の豐澤仙十郎

◇人形の精神に就て……安藤鶴夫…（二）
◇文樂への希望……齋藤拳三…（八）
◇文樂の想出……綿貫六助…（一一）
◇文樂樂屋圖繪……宮尾しげを…（一四）
◇文樂座に就て……（一六）
山崎紫紅　上司小劍　德田秋聲　高安月郊
伊原青々園　近松秋江　岡鬼太郎　額田六福
中山楠雄　三宅周太郎　中村不折　高濱虛子
平山蘆江　本山荻舟　田中煙亭
◇吉田玉藏に贈る……小泉蛙鳴…（二〇）
◇淨曲うろ覺え（卅二）……田中煙亭…（二三）
◇東都義太夫會と淨曲振興會……（二四）
◇全國素義略傳……（二六）
◇太棹時報……（二八）
◇太棹社彙報……（二九）
◇各地通信……（三一）
豐澤仙十郎●佐伯秀哉
◇太棹ニュース……（三二）
◇編輯後記……芳河士記…（三三）

# 「人形」の精神に就て

――芝居雑記――

安藤鶴夫

――「堪へかねて駈出る合邦、娘が髪引ツ摑みぐつと差込む氷の切先」これは怒りに堪へかねた合邦が、十年以來蚤一匹殺さぬ手で、娘の玉手を殺さうといふ、「攝州合邦辻」下の卷、最高頂の場面である。

合邦が榮三、玉手が文五郎、明治座の八月、むし暑い晩のことである。

この合邦が、身も世もなく怒りに震へて述懷してゐる間、玉手が立身で刺されて苦しんでゐるのだが、文五郎は、後の納戸の暖簾をあけて、黑衣を着た弟子に、大きな團扇で煽がしてゐる。

この玉手の人形の手傳ひ、足は弟子の文之助、左遣ひは「しんたる夜の道」から「引立て〳〵無理やりに納戸へ」迄の前半が政龜、後半が玉米である。この玉米はひどい近眼だが、あれ程、一念籠めて刺されたものが、手負ひになつて、よくもまあかうも動けるものだと呆れ返る程、左右前後に動き乍ら、文五郎はわざ〳〵顏を向けて何度も、この手傳ひに文句をいつてゐる。

玉手が本心に打明けた後、鮑の貝に肝臓の生血を取つて、俊德丸に飲まさうといふ件で、合邦が憎いと思つた張合ひだからこそ、切りも突きも出來たのだが、今はもう心底可愛い娘を、どうして酷しくそんなことが出來るものかと、奴の人平と讓り合ひ、とゞ、玉手が、「エ、未練な用捨」となる迄、文五郎は舞臺にゐない。黑衣を着た人形遣ひが、玉手の胴に右手を入れて、代りに遣つてゐるのである。

この二の替り、「酒屋」で、文五郎のお園。段切り近く、心中に行く三勝と半七が、格子の外迄別れにきての愁嘆で、こゝは、當然舞臺下手の二人に讓つてしまふ筈の場面だが、抱えたおつうを、宗岸や半兵衞に見せて廻つたり、最後に姑の傍へ坐つて、床の三味線の調子に合はせて、おつうの人形をぴよこ〳〵と動かしてゐる。その動かし方といふものは、

恰度その三味線の節が、チャリ風に拍子をつけていへば、さう聞えるのだが、まるで文五郎は「はツどつこいどつこいどつこいなツと」といふ風に、調子をとつて動かしてゐた。

――昭和六年七月、おなじ明治座に、土佐太夫、吉兵衛で「酒屋」が出た時、私は文五郎のお園の型を取つた。近頃、大歌舞伎では「酒屋」を全然上演しないので、これは一寸他に必要なことがあつたので、四日間通ひ詰めて、「子故にくらむ黄昏時」のお園の出から、段切り迄、微細にその型をノートに取つた。が、驚いた。ある件では、毎日文五郎は全然違つた型をする。例へば段切りだが、ある時は「歎きにうづむ我家の内」といふ文句で、親達を殘した儘、づん〳〵正面の納戸へ入つてしまふ。さうかと思ふと、姑におつうを見せ乍らあやしてゐて、そのまゝ幕になつたり、おつうを抱いて、容席に後向きで立身、幕の降りきる時分に腰を落してみたり、その他、これも三味線の調子に合はせて、おつうを立たせて歩かしてみたり、仕たい放題のことをしてゐる。いつたい三勝とか半七には、人形遣ひでも若手が廻るので、舞臺正面で文五郎ぐらゐの位置のものが、かう迄ちよこまかと小刀細工をしてみせては、自然格子外の二人より、お園の方に氣をとられてしまふ。かういふ件は、歌舞伎と違つて、餘計な動きなどせずに、全然表の三勝と半七に舞臺を讓つてしまつて、人形は不動でゐるべきで、そこに歌舞伎でない人形本來の面白さがある筈である。ところが、文五郎の所謂組見、お札を賣つた日に限つて、必ず文五郎のお園は幕切れ迄舞臺にゐて、例の通りちよこまかと小細工をしてゐる。人形の座頭である榮三といふ、正しい人形遣ひが合邦に廻つて、玉手を遣ふ場合でさへ、文五郎は以上のやうに勝手氣儘なことをしてゐるのだ。況てこの「酒屋」で、玉次郎とか小兵吉の宗岸、玉松とか門造の半兵衛、それに玉七の女房では、幕切れ迄のほんの二三分の間が待ちきれずに、づん〳〵一人で納戸へ入つてしまふぐらゐの不貞振りは、文五郎にとつては當然なことなのであらう。

この七月から八月へかけて十日間、歌舞伎座で打つた文樂座の引越興行が、暑さの加減で避暑に行きそびれた連中に、吉例のお札を無理にも押しつけて賣つた結果、千秋樂には、思ひもかけない當り祝ひ迄出た。その上景氣の後で、恰度浪花節と新國劇との間に、五日間、小屋があくといふ明治座へ、藝題二回替りで、例の松竹の一つ覺え、闘に乘つてやつた太夫三味線の中堅興行のうち、以上はその第一回の「合邦」と、二の替りの「酒屋」に就てだけの、文五郎の玉手とお園のほんの一例を取りあげたものである。

いつたら際限がない。敢て文五郎の藝そのものに就てはこゝでいふまい。

料簡である。藝人の料簡である。これ程人を嘗めた、これ

程人を馬鹿にした藝人は、乞食藝の浪花節にも萬歳の藝人にもゐまい。

日本演劇に於て、最も尊重され、その保存にさま〴〵な考慮を拂はれてゐる人形淨瑠璃といふ、この嚴肅な藝術に於てこれ程迄に、凡そ根據のない、出たとこ勝負の輕薄な人形遣ひが、別書出しといふ、座頭の榮三と殆ど違ひのない位置にゐるのだから、言語道斷、全く憎みても餘りある存在といふべきである。

而も、この文五郎が、一度下手の小幕をあけて出てくると、觀客は一齊に拍手をする。だいいち一段のうちに、あゝ迄何度もやるものではないさうだが、はツと掛聲をして後向きの型をすると、觀客は、てもなく、なんて巧いんだらうと歎聲をあげる——。

荒ものゝ人形ならとにかく、女の人形を遣つてゐて、文五郎、紋十郎のやうに、いち〳〵掛聲を掛けるのは、人形淨瑠璃には斷じて許されないことなのである。藝力の不足のために、掛聲をして觀客の注意を牽き、無暗に後向きの型をみせては、人形遣ひ自身が、右手を自分の腰にやつて見得をする。これでは人形を見せるといふより、寧ろ人形遣ひ自身を見せるといふことに他ならない。

いつたい、東京の松竹社長が、人形の出遣ひが好きで、始めから終り迄、ほんの一寸した端場ぐらゐを除いて、全部出遣ひにさせる。人形遣ひの値打ちは、あの黑い頭巾に顏を隱し、黑衣を着て、人形遣ひ自身を、その中に消して遣ふところに尊い價値があるのだ。

あの人形遣ひの黑衣は、腰のところを赤い紐で結んでゐたものだが、榮三が、赤い色では、觀客に目立つて邪魔になるといふので、現在のやうに、その紐も全部黑に改められたのである。これもほんの餘談的な一例だが、榮三が如何に正しい精神の人形遣ひであるかは解らう。派手な肩衣をつけて、樂屋で油を塗つたり、顏にクリームをつけたりして、藝以外の餘計な神經を使ふ出遣ひが、假りに道行とか景事ものなら知らず、どれだけ舞臺にさま〴〵な邪魔ものを、含む結果となるかはいふを俟つまい。元來、日本の芝居では、黑は無を意味する約束がある。榮三の黑衣改革の精神は、すぐさま以て人形遣ひが、舞臺に、人形に、少しでも邪魔にならないやうにといふ、人形淨瑠璃本來の正しい精神から行はれたといふことが出來る。この一事からでも、女の人形遣ひの掛聲が、如何に邪道であるかは、當然理解される筈である。

この文五郎や紋十郎に拍手を送り、感歎を惜しまない觀客の眼は、團栗だと嘲笑されてもそれは止むを得ないことである。

文五郎の弟子に、文作といふ若い人形遣ひがある。おなじ「合邦」で淺香姫を遣つてゐたが、その二日目に、人形の右

手に手拭を持つて、自分の顏を拭いた。人形の右手には、恰度手首のところに指皮（ゆびかは）と稱する皮がついてゐて、こゝに人形遣ひの右手の人差指をいれて、物を持つ仕掛になつてゐるのだが、つまり、この淺香姫は、正面を向いて、少し俯向き加減にしてゐ乍ら、突然、その淺香姫を遣つてゐる人形遣ひの顏を、突拍子もなく、淺香姫の人形の右手が拭いたわけになるのである。人形遣ひが、舞臺で汗を拭くにしても、榮三などは殆ど氣のつかないうちに、急いで人形の陰に自分の顏を隱すやうにして拭いてゐる。而も、その遣つてゐる人形は、少しも體がくづれない。國寶人形淨瑠璃を如何に保存すべきかなどといつてゐる現在、若手の人形遣ひに、かういふ恐るべきバチルスがゐるのだ。

おなじく文五郎の弟子に、人氣者の紋十郎がゐる。歌舞伎座の第一回の追出（おだ）しに「五條橋」が出た。紋十郎が牛若で、二日目からは是非花道から出してくれと、樂屋の主任に賴んださうであるが、これは三日とも花道を使はないで、舞臺下手から出てきてゐた。その後、「戾橋」が出て、紋十郎の若榮である。が、たうとう思ひが叶つて花道を使つた。即ち若榮の出で、花道にぱつとライトが入ると、せり出しである。見現しになつて、鬼になり、頭の毛を振り乍ら、これが綱と一緒に御叮嚀にも、舞臺前面のシゲ棧を通り越して、花道の七三までやつてくる。

花道を使ふなではない。可成以前から人形でも花道の使はれてゐる例はある。近い例が、去年の「勸進帳」で、榮三の辨慶の引込みに、或は「千本櫻」の道行で、狐忠信の出に、おなじく榮三が狐を遣つて花道から出る。が辨慶は、榮三の藝の迫力によつて、見事この花道の引込みを生かしたのである、狐は榮三以前からも、花道から出るといふ前例もある。

が、牛若が、どういふわけで、花道から出なければならないのであらう？そこには、たゞ紋十郎が、自分に箔をつけたいばかりの、人氣を狙つたさもしい藝人の乞食根性ばかりしかないのだ。

殊に、今度「累」の土橋を見て、しみ〴〵さう思つたことだが、この土橋は本手摺（ほんて）といふ、歌舞伎の所謂二重の位置が土手になつてゐて、人形はこの土手から前へは觀客に近づかない。これは昭和二年、京都の南座で見た時もさう思つたが、實に人形に魅力があつた。人形の頭（かしら）は、傍で見たのでは決して魅力のないもので、舞臺で遠く離れてゐて、始めて美しく生き〳〵とした魅力が感じられるものである。花道を使ふのが邪道であるといふことは、傳統にないから、などといふことではなく、昔からの人形遣ひが、既にこの人形のいはゞ缺點を知つてゐて、殊更、觀客に近づかないやうにしてゐたのだと思ふ。かういふ點、有繋古人は自らを知つてゐる。

傳統の尊い所以は、幾時代かの永い間に、洗練に洗練を加

へた擧句、出來上つた一つの拵であるからで、敢て人形淨瑠璃といはず、何にせよその本來のものを深く考へる時、傳統は決して空虛なものでない筈だ。

その人形の魅力を破壞して迄、殊更花道を使ひたがるといふ紋十郎の料簡が、人形淨瑠璃を滅亡させるものでなくてなんであらう。

文五郎が、弟子の紋十郎に、時に見兼て注意をすると、これが受けるのだから仕樣がないといふさうである。眞實の價値でない、愚味なる觀客による空虛な人氣といふものが、どこ迄、藝道を毒するのであらうか。

この「戻橋」の時、日本大學の學生が、紋十郎の後援會といふものやつてゐた。尤も、法政の文樂研究會でも、去年紋十郎に人形の講演をやらせたらしいから、あんまり口巾つたいことはいへないが。

紋十郎の弟子に、紋司といふ人形遣ひがゐる。去年歌舞伎座で「御殿」が出て、文五郎の政岡に、千松をこの紋司が遣つた。

政岡が鶴千代を勵ますために、我子のことを「千松などは叶はぬ〳〵」といふ件で、下手に座つてゐる千松が、悔しがつて右手を目にあてゝ、顏をゆすつて泣いた。

雀の唄が終つて、狆が出る。政岡がその狆に、毒味をさせるために、おすべりの御膳を食べさせると、鶴喜代が羨ましがつて「乳母おりやアノ狆になりたい」といふ、政岡が悲しさを堪へかねて、お家騷動の述懷をするうち、千松が狆を膝の上に抱きあげる。こゝ迄はいゝ。ところがこの千松、狆の口についてゐる飯粒を取つちやあ、ちよこ〳〵食べ始めたものである。

つい先刻「お腹が空いてひもじう無い」だの、「名に負ふ武士の胤なりき」などといつてゐる床の土佐太夫こそいゝ面の皮である？何處の世界に狆の口から飯粒を取つて食べる千松がある？嘗て私はかういふ千松を見たことがない。

文樂座の人氣者の頭に、ツメと稱する人形がある、歌舞伎でいふ「その他大勢」といふ役どこの人形で、このツメが屢々ちよこまかと、主要な人形の邪魔をして小煩いことがある。この紋司は、背が一寸片輪じみてちいさいので、黑衣を着てゐても、はつきり紋司の遣つてゐるのは解るのだが、主要な人形の動きを邪魔するツメの人形が、殆ど例外なくこの紋司である。最近のいゝ例が「妹背山」の竹雀の官女である。初日に餘りこの官女がいゝ氣になつてふざけるので、歌舞伎座の表から注意してきたといふ。團栗眼玉の張本人に迄、目に餘つたのだから、如何にちよこまかと動いたかは解らう。

以上は、ほんの思ひつくまゝの一例だが、文五郎を始め、紋十郎、文作、紋司といふ、この一統の流す害毒が、どれ程人形淨瑠璃にとつて、文樂座にとつて、恐るべきものである

かは、今度文樂座が東上した時、改めて正しい眼玉で、まつたうな精神で確められたいと思ふ。

現在の、人形ばかりを中心にした文樂座の研究は、まさしく邪道である。人形淨瑠璃研究の九分通りは、その淨瑠璃にあるべき筈で、人形に眩惑されて、本來の義太夫を等閑に附してゐる研究態度は、毛唐が文樂座に對する關心と少しの變りもない。義太夫を理解することなしに、人形淨瑠璃研究などとは一場の笑話である。

元來、人形は極く特殊なもの以外、技藝、ある程度に達した人形遣ひなら、誰が遣つたところで、さしたる違ひはないものである。況て、せい〳〵佐和利の件ぐらゐで、あとは殆ど動きの限定されてゐる女の人形などに、研究などといふがものはないのだ。

今度の「寺子屋」の松王で、榮三は今迄と違つた型をした。今迄は、首實檢で松王が「ムウ、これや菅秀才の首討つたは」で、すぐ首桶の蓋を閉めたのを、今度は、玄蕃の「かくまうた科赦してくれる」で、始めて蓋をすることに改められてゐる。それまでぢいつと玄蕃の態度をみてゐるのだ。これは榮三の案である。なんといふ正しい案であらうか。松王の性根を理解した、實に正しい演出である。「首討つたは」で蓋を閉めては、まだ〳〵松王の性根にあざといものがある。首をその儘前に置いてゐて、それも決して殊更にではなく、玄蕃の態度をぢいつと目を引いて注意してゐる。玄蕃が贋首にのせられてから、始めて靜に首桶の蓋をする。

藝といふのは、飽迄、榮三のこの正しい精神を以てなされねばならない。

誰が遣つてもたいした違ひのないといふのは、その人形の型に就ていふことで、「いゝ型をする」ぐらゐなら、人形遣ひにとつて、先づ一寸した稽古で出來るのである。

いゝ人形遣ひとは、決していゝ型ばかりをする人形遣ひではない。要はその人形を遣ふ精神にある。

人形淨瑠璃に關心を持ち、少しでもその保存を思ふならば、まさしくこの點をこそ注意して、改めて文樂座を見直さねばならない。（八月）――『法政文學昭和九年十一月號掲載』

（後記）この一文は、去年「法政文學」の爲に書いたものであります。

近頃、各大學に、人形淨瑠璃の研究が盛になりましたが、それは殆ど人形だけに對する魅力からなので、大變心細くもなりましたし また石割松太郎氏などから、東京の連中は「團栗眼玉」だ、「椎茸耳」だと、輕蔑されてゐる事を、慨歎して、この一文を草した次第であります。

「東京は」と限られる事は、僕の江戸ッ兒魂が許しません。團栗眼玉や椎茸耳は決して東京ばかりとは限られません。都合のいゝ時ばかり本場と稱してゐる大阪で、文樂座がどれだけ對遇をされてゐるか。これ程に、この立派な藝を疲弊させ、名人も生れさせないやうにしてしまつたのは、將に本場の大阪の罪で、團栗眼玉と椎茸耳の大親玉は、實に大阪に他なりません。が、こゝで落語の「祇園會」みたいな眞似は止めませう。

要は、もう一度、はッきり文樂座を見直して頂きたい事で、正しい藝には心から拍手を、正しくない藝には嘲笑を、そして飽迄正しい藝人に、變な僻みを起させず、素直に眞つたうに育てゝゆく事を、僕はもう一度いひたいと思ひます。

今こそ、空虛でない、人形淨瑠璃の眞の價値を、はッきり摑む時ではないでせうか。（昭和十年七月末）

# 文樂への希望

齋藤拳三

興行上の動かせない都合であらふか、文樂の上京と云へば必ず眞夏の七月と暮の押詰つてからだ、私など文樂は「螢の光窓の雪」式に萬障くり合せ肉體を苦しめて味ふ可きものと思ひ諦めてしまつた。事實今から十數年前は交通が便利になつたお影松竹のお影で大阪の文樂が東京で味へますなんて喜んで居た人が可成あつたが、然し此れから文樂へ通ふ人、一年に一回は必ず來ると知つてる人が、こんな難行苦行めいた犧牲が拂へるだらふか、なんて此んな事を考いながら太棹社からの御命令の「文樂への研究と希望」其れを簡單に個條書にして見やう。

（一）　太夫を中心として

イ、三頭目の出し物

毎回津、土佐、古靱の三人の内二人にビラの効く各自得意の出し物をさせるのは結構として其の内必ず一人だけには何か研究的なめずらしいものを演らせてもらいたい。

やはり文樂は毎回同じ顔ぶれの見物が多いからだ。先月の古靱の「柳」の如き本誌の金王丸氏の細評の如く全く有難い聽きものだつた、もつとも二十年振りとかの此の出し物も其の若き古靱が京都の明治座で名人清六の餘りにはげしい三味線に堪へ兼ね途中で床を下りてしまつたと云ふ歴史附きのものだ、無論惡からふはずはない。あの前半のお柳を女義太夫式とセンチメンタルな調子で語られては全くやり切れない。柳の性を見た人もあるまいがさりとて案内人の女給さんの樣な聲を出されてはやり切れない。先年の雀右工門のお柳の如きも全く女性でも男性でも無い歌舞伎味の流露で見られたのと同樣である。流石は古靱よくあの研讃を積んだればこその成功であつた。土佐太夫の油屋の如きもこゝ十數年東京では出ない無論いゝものであらふ。義太夫も新作さへすればいゝのでは困る櫻時雨の成功も土佐だけの腕があるからである。

三人の内津太夫は一番短所をかくす必要の多い人だ、然も越路在世當時によく出た「お千代半兵衞」の「八百屋」「城木屋」等は此の頃出ないもので此の人の口に合つたものだら

ふ。先月の菅原の通しの一日燐りの如きは近來での名案であつた。あれなら好きな人は三日間日參するであらふ。

ロ、重用す可き大隅太夫

無器用で間延びな缺點は有るにしても三頭目を除けば最も樂しみの多い人である。然るに餘りにも此の人は不遇だ、いかに何でも小春太夫の八重垣姫に勝頼一役の如きは餘りにむごい。人物的に何か缺點でもあるのか其れは私ども素人の門外漢には解らないが、あれでは大隅を殺す樣なものだ。昔の義太夫は藝の大きさ力の强さを有一の生命とした。三代目長門太夫の時平の笑いは川向まで聞へたの長尾太夫の寢ながら笑ふ三日太平記の嘉平次は天王寺の五重の塔の上から下まで聽へたのと云ふ樣な强い逸話を斯道の理想とし唯一の名譽とした、然し此れは馬鹿々々しい苦しい命がけの修業がいる。だから此の種の太夫は全く斯道に影を斷つた、大隅は現在唯一人の力の太夫であらふ、大隅は命がけでどならせたい太夫である。其れには三味線に吉彌を附けたい吉彌の名手である事は論を待たないが今の文樂中一番太夫をたゝきのめして行ける三味線である。道八の樣なデリケートな藝風の三味線は力の太夫を養成するには餘り適當でない。其れにしても興行主は現在賣れる者だけを賣つて滿足す可きでない。も少し大隅の未來に着眼して欲しい。

（二）三味線を主として

イ、友次郎を誰かに附けたい

故淸六程の妙は無いにしても友次郎は今での文樂の最高峰である。無論綱造程の腕ぶしは無い。道八程の纖細な音色もない、然し此の人は二人にも無い味がある。一昨年東劇で古靱を彈いた時の「太十」と「すし屋」は今でもハツキリ耳に殘つて居る。

「現れ出たる武智光秀」の後の簡決な手、操のクドキ「妻は涙」からの「誠現はせり」までの件「お心たしかに持つてたべやいの〳〵」の件「すし屋」で「眼をしば叩き」の件「しあくり上げても」の件「出ぬ涙」の後の間「戻つた明けいと打たゝく」の附近部分的に云つてこういつた個所は他人に無い獨特の妙味がある。こんな一部分的な滋味の賞翫、かゝる少數意見も文樂存在意義の一つであらふ。私の理想から云へば此の人をつばめ太夫に附けたい。齡六十の坂を越し多病と聞く餘り衰へない間に若干のマネージアーとして存在させたい。功成り名とげて引退す可きは歌舞伎の中村歌右工門だ。今月の宮城野など全く迷惑だ友次郎はまだ其の時期でない。

ロ、文樂名物道八の三味線

あの鈴虫の樣な纖細な音色、永過る位な間、これでもか〳〵と無理にいゝ音をしぼり出す樣な藝風、一興行に一回位彼の三味線を聽かす爲の出し物を望むのも私だけだらふか。

私の理想は三味線は手強い程いゝと思ふ。其れは枯淡の域に入る、晩年は誰しも手強さが色あせてくるからだ、道八など凡そ最後まで光澤を失はない人だらふ。

ハ、三味線の文樂

義太夫衰退の一因は糸の過剰に對して太夫の缺亡である。時世の急しさは太夫に大成する樂天家よりも師匠と云ふ別の安全な道の附屬する三味線に大成する總明型の方が成功率が多いのだらふ、野球なら太夫は投手。三味線は捕手兼投手の批評家である。枯れた齒切れのいゝ新左工門、地色の甘いいかにも語りよさそうな仙系、下位の太夫を彈いてる、此れ等の名手をたまにはみつしり聽きたいものである。私は朝太夫と云ふ人が嫌いな爲ほとんど松太郎を聽かなかつたが、何でも少しづつ變つた手を彈く此の人はもつと聽いとく可きだつたと思つている。

（三）人形を主として

イ、人形獨特の技巧を守れ歌舞伎を模寫す可からず

歌舞伎芝居と人形芝居とは互に押されてる方が盛な方を迎合模寫して發達して來た。

然し私は人形芝居を見て一番嫌な事は人形が歌舞伎の眞似をして居る時である。パノラマの樣な近代的な芝居のバツクを淨璃瑠芝居へつぎ出した時辨慶が六法をふんで引込んだり當代人氣俳優と同じ着附を人形が着てたりする時である。反對に一番嬉しいのは芝居で演らぬ人形獨特の權威ある演出法をして居る時である。組打の熊谷が「氣後れに」のくり上げで足拍子を入れる動き。河庄の治兵工が幕切れに孫右工門の衣服を着て頭巾で顏をかくしての引込み、安達の貞任が櫻の花枝を持つての見得、七段目のお輕が勘平の位牌を持てのクドキ、白木の見舞に靑竹の手すりの日向島、書けは數かぎり無い人形獨特の演出法を心ゆくばかり味いたいものである。

ロ、時々は榮三と文五郎の役の交換

故玉藏の死後榮三は座頭として荒物使い專問になつてしまつた。事實其の造詣手腕は名實共に群を拔いて居る。然し前には女形を使た其れが亦文五郎よりも動きの少い腹藝で非常に面白かつた。尾上、八重垣姫、玉手御前等皆印象が深い。一方文五郎も古い番附を見ると簑助と云つた時代相當に立役を使つてる。古老に聞くと知盛などは實に美事なものだ層だ。無論あれだけに女形を使いこなす人だ、役によつては仲々面白からふ、たまには榮三の女形、文五郎の立役も見たいものである。老役使いの名手玉次郎、男女兩方いける政龜其れ等名手の違つた役もたまには見たいものである。

（四）すじ書の改良其他

出し物に關しては諸先生から色々の立派な御意見の出る事であらふ。私は差しひかへる、然しミドリに並べた場合、口語りを省略した場合等院本全體のすじ書をぜひ望しい。此の頃文樂三階には仲々若い學生が見へる其の人達の爲にも適當な院本通の人に簡單名快な全段のすじ書を作つて頂きたい。

亦出演者が、語りもの、使ふものの口傳、秘訣、苦心談の樣なもの、すじ書の末尾に丁寧に發表してもらつたら斯道の爲有益な參考に成る事と思ふ。

# 文樂の想出

吉例によつて、この夏、文樂が東上せらるゝについて、太棹子から、何か書けとの御命令ですが、さういふ研究物などのかける柄でもありませんので、せめては、文樂の思出噺でも斷片的に逃べさせて頂いて御勘辨を願ふ外ありません。

## 初めて文樂へ

初めて文樂をきゝましたのは、明治三十七年の冬でした。恰度、日露戰爭の沙河の蓮華山で負傷して內地へ護送された冬なのです。廣島衞戍病院で廿日あまり治療するうち、松葉杖で歩けるやうになりまして、單獨旅行を許され、大阪に數日滯在して文樂に通つたものです。外にも單獨旅行組が幾人もありましたが、多くは、伊勢參宮、京都見物などに立廻りましたが、私は一心に文樂へ浸つたのでありました。

尤母方の祖父中村宗兵衞は一生太棹をいぢつてゐた隱居もの、私は小供の時から義太夫なら戰爭よりも好物で命のいらぬ方で、戰地でも、隊長や參謀長などに呼ばれて始終跛行節を唸つたものです。

綿貫六助

浮草のやうに流浪の一生、師匠には、兵士あれば、姐さんもあり、按摩さんもをり、幼時の師匠は母と兄、吾妻の文治郎、森下の市助、戰爭前後からは、仙臺の梅園、會津に四五人、東京では一二、二三龍、出雲太夫、新次郎、都太夫といつた巡禮ぶりで、でも一念は惧るべきもの、師匠も有名なのが同情してくれるやうになり、負傷の跛行の癒るやうに、跛行節もだん〳〵快方に向つてどうやらものになりさうです。

で、自由旅行を許された私が、一人で文樂へ飛込むのに何の變哲がありませう。

そこで、最も强い印象を私に與へたのは、田舍の土百姓の如き顏をしたあの越路の喉でした。ハラがあつて、聲が佳くて、三も一も完全に兼ね具へ、その性格表現の切實さといつたら大したもの、耳の乏しき私でも、これや、名流を超越した大家だと思つたものです。

## 素破チャンバラ！

その後十年で私は軍隊を退き、早稻田の文科で遊んでゐた

六七年間といふものは、かなりにタンノウしたものです。
その生徒の頃文樂が東上したある夏、私は毎晩かゝさず以前の歌舞伎座に通つたものです。
貴田氏の藝は愈々圓熟し、私の傾倒しかたは熱烈を躍越えた燦烈狂烈なものでした。
その頃私の心は何と形容してよいか、とにかく、越路太夫にはあはずにはゐられなくなつたのです。
酒に力をかりましたが、幾度か樂屋へ入りそびれてしまひます。
たうとう、ある晩のハネに、例の泥醉で、幕になると、舞臺に突進し、搔きあがつて、眞暮らに樂屋に躍りこみますと、二三人の袢纏着に取捕えられました。
『入つちやいけまへん。』
『そない醉ふてゝ、まあなんや?』
『醉つてはをらん、俺は藝術家だ。越路太夫にあふのだ』
『へン、そないな藝術家があろかいな。染絣に小倉袴の、おほゝゝ。』かういはれたから、蓮華山へ突擊の如き腰つきをして、素破、チャンバラといふ刹那に、なかへ割つて入つたのが二人の弟子であつたので、双方で和らぎ、私が熱狂的な信者といふ意味が通ずると、湯からあがつた常次郎氏は、その翌日築地の龍名館で會ふから晝過ぎにそこへ來るやうにと弟子を以て傳へられました。私は天にも昇るやうな氣分で歸つたものです。

文樂から私の得たもの

その翌日、およそ三四時間も、多くの面會を弟子に斷らせて越路太夫は、私の爲に種々な話をしてくれました。
鷄卵を五つばかり持つて參上したと思つて頂きます。越路の方からは、風呂錢だ手拭だ扇子だ何だかだ、およそひとかゝへも下さつたものです。
『太夫さんに、此方からもつてゆくのが當然なのに、玉子五個で、こんなに釣つてくるとは——』
妻は涙を拭きながら笑ひました。
『玉子五つも、ひとかゝへもありやせんよ。私が、あの大家から得たものはほかにある。』
『なんですの?』
『人間の言葉などでいへるものか。』
『へえゝ——?』
『あの偉大な藝人の靈氣だよ。何者をもつてしても、おかす事のできぬ莊嚴な靈の力を感得したのだ。』
『解りませんわ。』
『鳥渡、說明しようかね、かういはれたんだ——聲ではない、節でない、心だ心だ——心底が女を求むれば、それ相應に下落した義太夫になる。心底が名譽や金を求むれば、名や

金錢以上に拔けることのならぬ縛られた藝におはる。さういふ樣々なものから離脫せん限りは、心が明鏡の如く玲瓏と澄徹らぬ限りは、何者も如實に映描出せるものでない――といはれた。』

私は半葉にかういひましたが、妻は解らぬ顏をしてゐます。

この心掛を煎じ詰めますと、里見弴氏の藝術論になりますが、至藝達人は何處か一脈相通の急所がありさうです。

どうも、適はしく言ひあらはせませんが、私が文樂からの大所得は、かういふ淨聖な心境なのであります。否心境への一歩を踏出し得たことです。

近來、あの津太夫の切々と芯に來るところなどを考合せますと、なる程、『聲にあらず』も一面繪說きがつきさうです。かくして文樂を歡迎する幾春秋、私は、心うれしく、――義太夫は限りもなく廣く遠い入間修業の藝術だと思ふやうになりました。可祝！

## こゝろいき抄　駒滿堂

人形芝居

あつちこつちと操り人形もつれも見せない冴えた藝
妙な素振りをする人形のかげで操る人がある
戀にや野呂松まだ木偶の坊先きは道具に遣ふ靑
腹で泣いても顏へは出さぬ人形を眞似なきやならぬ意地

心中もの

義理と人情に心中させて無事に二人を落したい
男女と重り合つて死んだ背中へ花が散る
義理も世間も心中立の前にや命もない覺悟

## 文樂座に就て

（原稿締切後到着に就きてこの欄へ掲載致します）

田中煙亭

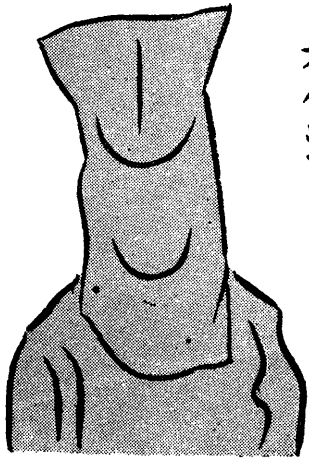
一、津太夫さん、古靱さん、つばめさん、吉兵衞さん、榮三さん、小兵吉さん、政龜さん。

二、何と申しても腹の强い事、大物をウンとコナス人津太夫さんと人形の榮三さんに及ぶ人は無いでせう。古勒さんは例の研究的で、又品位あり滋味ある點で、つばめさんはすんなりと癖もなく未來を囑望させる人で好きです。吉兵衞さんの絃は、音に於て鳴る事に於ては或は他に其の人あるかも知れませんが、あの間拍子の好い事、撥に心ある彈き方、正に文樂第一です、況んや近來耳立つて鳴り出した事は嬉しいとおもふ。小兵吉さんと政龜さんはズツと以前から私の好きな使ひ手で、役によつては無類な藝を見せてくれます。

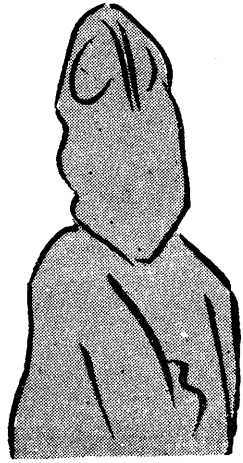
三、近時キヤ〳〵と上景氣といふ事ですが、何といつても文樂は行詰りの形です。一度叩き壞して建て直す法は無いでせうか。

# 文樂

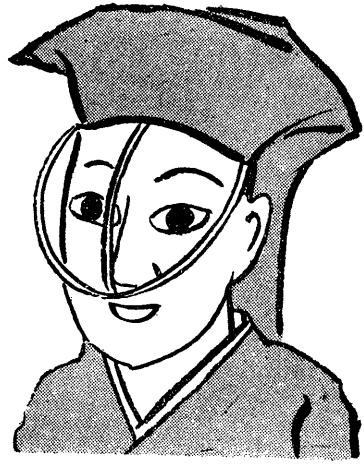
## 宮尾樂



桐竹流



吉田流



◇◇人形遣ひの頭巾◇◇

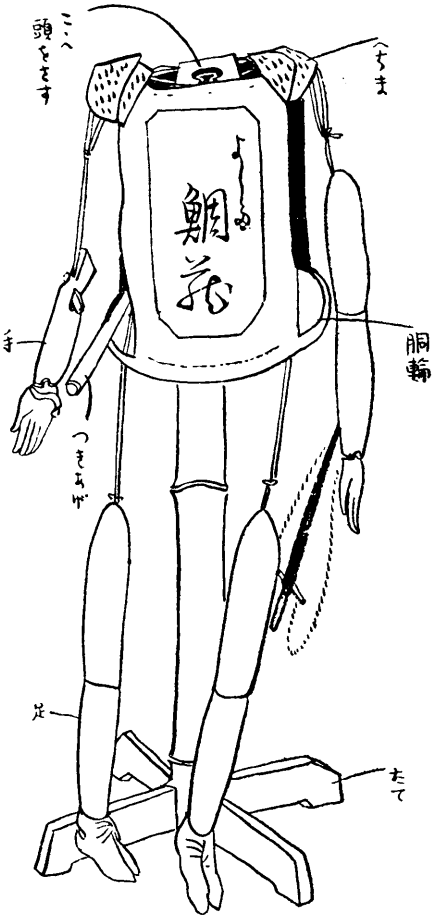
出遣ひ（上下を着て出る事）でない時黑い衣裝をきて出る時の頭巾をみれば、ハ、アあの人は吉田流の人だな、桐竹流の人だナ。とすぐ判ります、挿畫をごらん下さい。この頭巾に用ゆるものは冬は木綿、夏は麻といふのが原則だそうで、身分によつては、紋繻子や、びろうどを使ふ人も現在では見うけます麻にかぎつて顏のところに鯨で鼻筋を通します。これは、夏あついので汗が出ると、これが無いとべた〳〵と頭巾が顏へくつゝくので、それを防ぐ爲です。頭巾の寸法は三尺五寸を二ツに折つて袋にして二尺五寸を前に垂らして襟の見えぬ樣にかぶり、一尺を後に廻します。鯨の鼻筋を近頃は細い針金で作つたのも出來てます。

# 屋しげ圖繪を

## ◇◇人形の胴◇◇

人形も衣裝をつけてゐると仲々立派ですが衣裝をとつてしまふと、圖の樣になつてしまひます。よしだ鯛藏とかいてあるのが人形に取つては一番大事である胴です。この鯛藏といふのは故人で名人だつた人で、その人が使つた胴なのです、これは相當長い事使用できるものです。現在ですと吉田榮三が作つて自分で使つてゐれば、こゝへ吉田榮三とかいてあります。

圖のへちまとある所は、今ではお湯の時しか使ひてないらしいへちまを切つてぬいつけてあります、これが人形の肩にあります、それから兩方に手が下ります。胴は竹の輪の前後に布がついてゐるだけで、布が胸になり背になります。胴輪は胴の輪廓になります。胴輪の中に紐があり、それへ足の紐を結んで足をきめます。左の方につき上げといふのがありませう。これは竹で出來てゐて、人形を遣ふ上に一番大事なもので、人形の形を作るのに、この竹の棒を腹で受けてさゝえたり胸で工夫したりしてこのつき上げを利用します。これが無いと長い時間舞臺に人形が動かずにいる時なんか形が崩れてしまふのですたては人形をさしておくものを云ひます。



# 文樂座に就て

（到着順）

劇文壇の諸名家によつて次の御解答を得ました。人形淨瑠璃研究の上に多大の貢獻ある處と信じます。

（一）文樂座の太夫、三味人形遣で誰をお好きですか。
（二）その理由。
（三）今後の文樂座に對する御註文。

☆

**山崎紫紅**

私は博愛家で、だれでも好きになる。文樂の人達でも取立てゝ云はれません。津も土佐も古靱もそれ〴〵の長所があり、また短所もありませう。私は人間にはよい所が一ケ所なり、二ケ所なりあつたら、それでよからうと思ふ。

人形遣ひにしても、文五郎の大人氣もさる事ながらあれも名の下空しからずであらうし、また榮三の堅固なのに尤も敬服する。

しかし好き嫌ひと云つたら玉治郎が好きと云ふのかも知れない。あの人は表より裏で働く方で、いつも役は少いが寺子屋の源藏紙治の孫右衞門といふやうなものを一番好く、中にも新口の親孫右衞門は至藝中の至藝で、あの時には文五郎も榮三も消えてしまふやうな氣がした。理由と云はれても困るが、好きに實は理由はなく、これはあとから分析して付合せるものであらう。

文樂座に對する註文は能樂の如くあれと云ひたい、なまじ三勇士などに手を染めるのはいやで、あるたけのものゝ勉强で、その中からにじみだす藝を釀製して欲しい。若當つては東京の本物に通したもの、たとへば千本櫻や手習鑑のやうなものを出して貰ひたい、いつも口取のやうでなくあつて貰ひたい。

☆

**上司小劍**

義太夫はよくわかりませんが、いまのところ、津太夫をやはりいゝと思ひます。土佐太夫はもと嫌ひでしたが、ちかごろはその平明な語り口を愛するやうになりました。三味線では友治郎が好き。人形つかひでは榮三をよいと思ひます。文樂座に對し、別に註文もなにもありません。

☆

**德田秋聲**

（一）太夫では何といつても津太夫が一頭地をぬいてるやうです。人形は餘り注意してゐません。好きでもありません。絲は道八が美しいと思ひま

す、達者なのは綱造、今一人昔東京に長くゐた人で、綺麗な彈き方の人がありますが、ちよつと今名前を思ひ出せません。久しく聽かないので　。

（二）津太夫の好きな理由は云ふまでもないことと思ひますが、テクニツクについては何も言へないけれど、たゞしたゝかな太夫だと思ふのです。先代の大隅も語ることは名人でしたが、津太夫はあれよりも品があり、聲に艶はないが、底に非常な艶があり、氣魄と才情が溢れてゐます。古靱、土佐などの上手な太夫との距離は相當大きいものと思ひます。

津太夫がなくなつたなら、傳統的な文樂が事實的に崩れるでせう。團十郎を失つた歌舞伎劇以上の損失かとおもひます。歌舞伎と義太夫の藝術の立場の相違から見てさう言へるでせう。人形は見せ物にすぎないでせう。

（三）時代的に見て、註文のつけやうのない性質のものだと思はれます。

☆　高安月郊

、太夫では土佐、人形では文五郎

一、土佐は若い時の艶も老熟して言葉に情味が深くなつた。文五郎の形の好さ、先代紋十郎に通ふ、　昨年の榮三の新作の老女の引込も忘れぬ。

（三）出し物がきまり過ぎた、昔のでも復活して好いのを詮索し、新しいのは時事の當込などせず、純藝術として取るべきを選んで出す樣に望む。

☆　伊原青々園

折角のお尋ねながら、人形や淨瑠璃は一向不案内にて、御答いたしかねます。只申上げたきは、淨瑠璃の効能として忠孝皷吹をあまり高唱すべからずといふ事です。菓子はうまいから賣れるので、それが藥になることを看板にする時は、即ち菓子の賣れなくなる時です同時に古典藝術といふ事をあくまで忘れないで、あまり新作などに無駄骨を折るべからずといふ事です。

☆　近松秋江

文樂座は大好きなのですが、一二年ちよつと御無沙汰がちです。やつぱり津太夫がいゝです。小うつぼもいゝです。

土佐を好いたのは、隨分昔でした。今も惡くないのでせうが、どうも、あゝ、後を長く引張るのが氣にかゝります。

思ひ起せば、私がはじめて、この人に傾倒したのは、義太夫を好んで語つてゐた、故郷の父と　所に、岡山で聽いた時からです。それは明治二十六七年の頃。四十年以前。その時分、よく故人の朝太夫、伊達、春子でやつて來ました。伊達が土佐に改つた時分からどうもあんまり、よくなくなつたので

ないか。

☆　岡鬼太郎

芳書拜誦御懇命難有奉存候　然る處小生昨夏より演藝に關する一切の執筆を斷念仕り候に付御諒承被下度候　先は御返事迄匆々

☆　額田六福

一、太夫では何と云つてもつばめに期待します。聲量の豊かな點だけでも有難い事です。

次に相生が好ましく思はれます。語り口が地味ですが、おつとりとして、上品な處を買つてゐます。もう少しいゝ場を語らせてやりたいと思ひます。

人形では若い處ではやはり紋十郎でせうね。

二、文樂への註文と言ふより松竹への註文。向後は歌舞伎みたいな大劇場で上演しない事。演し物では一番目はなるべく、通してやつて貰ひたし。勿論、端場なんかをぬかないで——。

☆　中山楠雄

（一）太夫では、古靱太夫。三味線では清六。人形では榮三。

（二）この人達程、現在眞劍な態度で舞臺に上る人達はありません。同時に人形淨瑠璃の最も正しい傳存者でもあります。

（三）通し藝題の上演。さうすれば三頭目の語場から、他の中堅の語場迄、なんの苦もなく直ぐに決定するので、みどりの藝題を上演する爲の、馬鹿〳〵しい苦勞は入らなくなるわけです。同時にこれがこの古典藝術を傳存させる最も正しい態度ともなります。

それから大劇場公演は止める事。文樂座引越で最もいゝ小屋は明治座、演舞場です。そして七月だの十二月だのといふ御難な月に來させない事。人形淨瑠璃觀賞は秋から春迄でありませう。

☆　三宅周太郎

一、すべて好き嫌ひはありません。

二、自然よければこそほめ惡ければこそ非難するわけ。

二、永久に「勉强」の二字。

☆　中村不折

一、古靱太夫、若手でつばめ太夫、故人鶴澤清太郎、今では道八師、若手では芳の助師、人形、榮二丈、文五郎若手では紋十郎丈。

一、理由と聞かれると一寸答へ兼る、一體藝術を賞翫するのは只何となく良いと思ふだけで理由などをいふ事は出來ぬものでありませんか、今はそのやうに理屈ばるところに藝術味の幾分をそがれるものではありませんか。

（三）我々素人は人情味の多い歌唱

の面白いのがすきであります。あまり理屈ばつた歌唱の少ないタトヘバ引窓の如きものはあまり好みません。タトヘバ朝顔宿屋とか忠臣藏七段目とか、熊谷陣屋等大すきで新しいものは總體に好まず。殊に肉彈三勇士などはドウモ歡迎する氣にはなれません。

☆　高濱虛子

私は二十臺の頃京都の學校の學生であつたのですが鄕里の伊豫松山に歸省の途次大阪の文樂で攝津大椽とか先代津太夫それに先代吉田玉造先代桐竹紋十郎などに感心してゐたのですが此頃は餘り見ません。

今の津太夫の筒の大きいのと腹の確りしてゐるのに敬服してゐます。

☆　平山蘆江

一、と二、土佐太夫は伊達太夫の頃から、只むやみに好きです。理由などありません。

津太夫は不器用でまじめな點が好きです。

三味線では道八の氣骨と清六の端麗と、新左衞門の巧者と綱造の立派さ

さう云つて來ると皆好きのやうですが——

人形では榮三の强さを尊敬します。紋十郎の熱心にも時々打たれます。政龜といふ人も少し好きです。

三、文樂座には註文を出したくありません。文樂座を動かしてゐる松竹へは註文はありますが——

☆　本山荻舟

一、個人若しくは藝風としての好嫌ひはありますけれど、藝術家としての好嫌ひといふことになると、私情を夾むべきでないから、遠慮すべきだと思ひますが。

二、個人としては眞摯に精進する人が好き、器用を鼻にぶら下げて、藝を浮める人が嫌ひ、藝風としては堅實を好み、ケレンを厭ふ。

三、人形の演技に、歌舞伎からの逆輸入と思はれるものが往々目につく、採長補短は結構ながら、多くの場合は氣障になり、折角の古典味を傷けると思ふ。それからこれは文樂座へでなく、松竹へ對する註文かも知れませんが、東京への開帳に、目まぐるしい狂言替りは、眞面目な鑑賞者の感興を殺ぐこと夥多しい。理想は通し興行ですけれど、讓歩して先づ二替り位に。さすれば狂言の立て方にも、もつと充實を期せらるべきか。みづから輕んずることは、やがて東京の客を輕侮する意味にならうと思ひます。

四代目

# 吉田玉藏に贈る

小泉蛙鳴

玉松さん

副頭玉藏を襲名しましたね。

新橋演舞場の樂屋で「八陣」の後藤又兵衞の寫眞を撮らせて頂いてからもう六年を經過しましたが、その間色々の事件がありましたねえ。

初開場文樂詣うでの折、本田のお宅を訪れ、お酒を御馳走になり、藝談に時の移るを忘れる位、親しくしてゐた間が、「鬼界ケ島」の劇評から不和を招き、東京公演の際にも樂屋を訪れる事が少くなりましたが、私は吉田玉藏の名跡と貴方の生一本な氣性を愛してゐたし、亦、玉藏を襲名する人が貴方以外には認められないので、長い間私は鋭い凝視を以て貴方の舞臺姿に接しました。

新橋演舞場に出演當時の貴方の藝は「又助住家」の又助や、「八陣」の又兵衞の長六法等で觀客を唸らせてゐましたし、私も「力の人●玉松」と賞讃してゐましたが、如何にも柔らかみを缺いてゐましたので、「千本の道行」の忠信の寫眞で外國に迄有名な玉藏師の後繼者としては未だ〳〵物足りなく感じました。

日本が世界に誇るべき人形淨るりに關與する人々の内でも、人形遣は極く少數ですから、お客の目に變化を與へる爲めには自分の役柄と全然違つた役も遣はねばならなくなります。そこで役柄が違ふから不味つてもかまはないと言つて仕舞

## 漫吟抄

大川端

菅原傳授手習鑑

時節を松王身方とみせて
　うまく機嫌を鳥居前
見るにも車輪が力がはいる
　若手揃ひのくるま引
明ける宅内冷たい仕打
　ちつともお顔を水奴
機嫌鳥邊野見送る門火
　今日は止めずに立別れ
憎いやり手の金棒引が
　止めてあわせぬ車曳
玄蕃押へて小憎い奴に
　させてやりたい赤い顔

假名手本忠臣藏

兜あらためする大一座
　手馴れた帽子はすぐ知れる
欺したからにはかうして松の
　廊下でうらみをいひ内匠

へばそれ迄ですが、少く共、座頭格になるには如何なる役でも、或る程度迄にこなせなければ不可いと云ふのが、私の持論です。吉田榮二氏も「泥場」の團七と「白木屋」のお駒を同時に遣つて少しも破綻を示さなかつたので、紋十郎師から座頭の折紙を付けられたそうですが、これには私も至極同感です。

私は此の持論を抱き乍ら、貴方の藝に圓熟の加はる日を待ちました。

暫くは期待を裏切られましたが、如何なる心理的變化からか、最近の藝格が昔とは別人の如く變つたので大變驚いてゐます。大袈裟の動作による見て呉れが少くなり、內面的に靜かに深みのある藝を示すようになりましたね。

榮二氏の光秀に對して十次郎を遣つても、今迄の荒々しさは全然影をひそめ、軟かでふつくらした味が認められるようになつたので、私は貴方の爲めに心から祝杯を擧げました。吉田玉藏の名前は恐らく次の人形座頭を約束されるでせうが、何卒玉藏の名を辱しめない爲にも短氣を封じて下さい。

生一本は貴方の長所でもあるが、短所でもあります。短氣を起して失敗した例は貴方の過去に於て少なからぬ事と存じます。

圓滿なる人格者として名實共に日本古典藝術の代表者となられる日の近からん事を祈ります。尙、これは餘談ですが、未來の精神病學の權威と折紙を付けられてゐる荒木直躬といふ先生の鼻の型が貴方のそれと實によく似てゐるので、精神病醫の仲間では貴方の事を「人形の荒木さん」と稱して、貴方の藝を注意してゐますから、そういふ人々の期待を裏切らないように努力されん事を祈ります。

妄言多謝。

× × ×

× × ×

おもふ一力醉ふたと見せて
　裏の裏ゆくはかりごと
飲まぬ酒には醉ふたと見せて
　飲んだ酒には醉はぬ主
酒に醉ふてもこゝろの中に
　始終忘れぬ主のこと

妹背山婦女庭訓

憎い世間が妹背の仲を
　さいて流るゝ吉野川
他人行儀に一桝隔て
　見るも嬉しい妹背山
戀の重荷を繫ぎし絲の
　切れて口惜しい妹背山
心と心の妹背の中を
　義理が隔てる吉野川
戀の妹山情の背山
　中につれない吉野川
妹背の契もたゞ筆先きの
　川も遠見の書きながし

# 淨曲うろ覺え

〔卅三〕

田中煙亭

## 時雨の炬燵

### ◇——紙屋内の段〔下〕

『夫の情と我が義理を一つに包む風呂敷の内に情ぞこもりける：　から、おさんの『私や子供は何着いでもとかく男は世間が大事、身請してアノ太兵衛めに一分立てゝ下さんせ』は、いかにも口惜しさうに、憎さげにいひます。

治兵衛の『過分なぞや』の次ぎへ『女房どん』とか或は『忝けない』とか入れて大いに泣きます、それから『内に入れるにしてからが、そなたは何ときいひさして　』は非常に言ひ憎くさうにいふのは勿論です。『面倒ながら眞實の妹、妹』のおさんのこの一度目の妹など、充分に泣いてよろしいのです。『傍で見る目もいぢらしき』カンのつぎ節と稱します。治兵衛の『コレ女房ども、親の罰、天の罰、佛神の罰は當らずとも…　』など、凄いほど悲痛に泣くのです。『女房の罰が恐ろしい』の次『ゆるしてたも』を詞に言つて、泣き聲をくり返してよろしいのです。『伏し拜む手を　』で、アヽコレ『旦那殿』を入れて『勿體ないわいな〳〵』から『手足の爪をはがしても』になります。

『治兵衛殿お宿にか』で五左衛門の出になります。治兵衛はひどく狼狽します。『夫婦はうぢ〳〵』です。五左衛門も『又質屋へうせるのか』は『ひツちやへ』とよみます『こつちへおこせとひツたくられ』は口早やに。

三五郎が奥へかけ入つたあと『鼻はなほも圖に乘つて』と入れて『大方かうであらうとおもうた』になります。

スツと飛んで小春の出『おもひは同じうき思ひ、身の言譯にきのくにや』はなるべくサラツと語ります『樣子ありげに内の體、逢うてはいかが』で切つて『と用水の　』とつゞけます。

それから五左衛門の『何もいふ事聞く事ないわい『おさん戻せば事は濟む』ですが、この『おさん戻せば』で故人になつた越路太夫が、非常に泣いたの聽いた事がありましたが、おやツとおもひながら、非常に好いとおもつた事があります。その情愛はツマリ後に解るのですが、この一言を、前を充分にお約束の強く語つておいて、このおさん戻せば事はすむの一言にホロリとした泣き聲を聽かせるのは、隨分難かしい語り方だが、おもしろいとおもひます。その後、氣をつけてゐますが、誰れもそれを聽きませ

ん、一つやつて見たらどうでせう？

悶着あつて『治兵衛とつくと心を定め』になり『コレ舅殿、此の五十兩は女房おさんが　』の詞は、かなり、怒氣を含んでよろしい『不足にはあらうが、もつてござれ』で五左衛門の『ヱヽ』と、不審と驚き例の『さうはかいやい』になり『イヤ又どういうても大身代ぢや』でアハヽヽヽと大きく笑ひます。

おさんの『桑山の丸子』を重ねていひ『呑まして下さんせ、おゝ氣遣ひしやんな』と治兵衛も『そんならしばらく別れてゐやう』あたりまで、充分に泣きます。なほ治兵衛は『舅殿も娘の事、まんざらむがうも　』は五左衛門の顏を睨むやうに見て、憎々しげに投げ出すやうにいひます。『つい戻りやる』を『一度返し』やうになろぞいの』も泣き聲で、言ひ切れぬ心で重ねていふ方がよろしいでせう。『子を捨る籔に夫婦の一股竹』とおさんが五左衛門に聽かれて立さります、後から驅けこむやうに來る小春『慕ふ子を見るに一人はいとゞ猶、おもひくずをれ抱きメめ、透せはすや〳〵稚子を、いぶりながらのくどき言』ですがこれはメリヤスで守り唄の調子で語ります。

『そなたもおれも』『そりやこなさんも覺悟極めてヱヽ忝ふござんすと抱きしめたる泣いじやくり胸と胸とにいはせけり』は、グツとしづめて抱きメめたやうに語ります。突如として『高砂や』と三五郎がでます。三五郎の言葉、殊に後の『アヽコレ泣かんすないの〳〵』や『きり〳〵呑んでさゝんせいのふ』や『さらばお酌を申さうかい』など、何れもこれは狂言調といつて、能の狂言に用ふる調づかひです。全然阿呆になつてしまつては困ります。お末が墨染衣、白無垢で戻つて來ます、『おさんが筆のちらし書』でこれを二人して讀み合ひます。『立て見ゐて見うろ〳〵と譯も涙にくれゐたる』の次へ『治兵衛又も取上げて』と入れまして『ナニ〳〵舅五左衛門申入候』となり、そこにはいろ〳〵の入れ事がありませう。『小春殿を請出し』と讀んで改めて小春の名を呼び　喜び合ふ氣味になる處で『娘さん事お末もろとも今日尼に致し』とあるので、ハツと治兵衛は、以下凄味を帶びて聲も次第に上がつて來ます。善六太兵衛が出て來てからの治兵衛の詞は、さらに上がつて、もう殆んど聲を出しません、『コリヤ二五郎〳〵、お末を連れて奥へ行け』のあたりは、上げるのを通り越して、聲がかすれて、出ないやうになる方がよろしいのです。

意味を充分盡さず又細目を略しまして大體以上の通りで止めておきます。

## 塵外帖

えむ・てい

時雨の炬燵

定木枕に治衛の頰を、つたふ涙やいくしづく

○

戀も恪氣もぬし可愛さに、我身一つをすて坊主

本社主催

# 東都義太夫會と淨曲振興會の成果

◇…東都義太夫界吉例の毎月行事たる身振劇入り東都義太夫會と淨曲振興會は、開會毎に非常な活氣を呈し、毎回超滿員の成績を以て斯界に君臨するは、出演者諸名家研究精進の賜と、同時に本社に對する御後援の現れとして深く感謝する次第である。

◇…**東都義太夫會**はその第六十　回を五月廿四、五の兩日、第六十　回を六月廿四、五の兩日、共にお馴染の淺草松屋ホールに於て開催し　**淨曲振興會**は第九回を六月廿七日、日本橋白木屋ホールに於て華々しく開催された。

## 第六十回　東都義太夫會

**【初日】柳（瀧脇まつば氏、絃、鶴澤鶴玉）**和田四郎など實に大きくて立派なもの、**忠四（金井辰稻氏、絃、豊竹岬太夫）**これは初めて高座に上げられたものだ相だが、役者ともイキが合つてよく、**宿屋（島田天賞氏、絃、野澤粂造）**なにしろ實に美しい聲で滿場を感動させ、**御殿前（宮本武藏氏、絃、豊澤團市）**は聲量もあり、落ち着いてしつとりした出來、**後（國井やまと氏、絃、鶴澤鶴玉）**は艶かに愁ひも利いてよく、**野崎村（細川清氏、絃、野澤道之助、ツレ、野澤越道）**は五十義會で氣をよくしての朗かな語り口に、滿場割れるやうな拍手。

**【二日目】忠六（川奈部銀司氏、絃、野澤道之助）**老巧な語り口で先づ滿場を締め、**堀川（飛石かなめ氏、絃、竹本仙君ツレ、竹本染之助）**如何にも嬉しさうにゆつくりと樂しんで語られ、**太十（菊地錦志氏、絃、竹本染之助）**充分もう身振劇に馴れた語り口で面白く、**鰻谷（松林福笑氏、絃、竹本阿生駒）**古强者として自由自在の出來、**鮨屋（玉井松樂氏、絃、豊澤猿平）**腹の强い方として、この熱演は素晴しく、充分情も語られて堂々たる眞打振りであつた。

## 第六十一回　東都義太夫會

**【初日】合邦（和田春和氏、絃、野澤道之助）**十八番中の十八番物として、先づ序幕から聽衆の度膽を拔き、**妻八（坂倉素遊氏、絃、豊澤良造）**味のある巧者な語りでよく、**太十（西田可松氏、絃、野澤粂造）**老巧なもので、活殺自在、**竹雀（保々長平氏、絃、鶴澤文之助）**珍らしい出し物の上に研究し盡くされたものだけに先づ申分ない出來、**忠九（松尾武市氏、絃、豊澤猿三郎）**珍しく身振劇へ出演されたが、名にし負ふ斯界の權威者、たゞ聽衆は感に打たれてゐた。

**【二日目】寺子屋（瀧脇まつば氏、絃、鶴澤鶴玉）**芝居のしよいやうに語つてゐ

られる所など實に巧者、布四（廣瀨いろは氏、絃、豐澤團市）得意中の逸品だけに、五分のスキもないつんだ出來榮え、沓掛村（平井　榮氏、絃、野澤道之助）これ亦珍しいもの、澁いいき方で巧みもあつて實によく、本下（平田平和氏、絃、豐澤團市）詞も可いが後半の愁ひなどよく受け取れた。鮨屋（寶藏寺天昇氏、絃竹本巴津昇）例の通り九日で慥えられたもの、しかも堂々と情を語り、腹を語られて一杯の出來はいつも乍ら流石と思はれた。

## 第九回　淨曲振興會

序席は一月からヅツと連續出演の新人が玉三（安藤都昇氏、竹本都太夫）五十義會に乘せた後のサハリを急慥えな爲いつも程の迫力はなかつたが、先づ手一杯の出來、忠四（福田柳蝶氏、絃、鶴澤鶴玉）しと〳〵と語り込んで、充分に腹も解るしこの至難なものをなんどりと語り捨てられ、酒屋（藏田都鳥氏、絃、竹本都太夫）最近慧星の如く現れた都太夫部屋の新人、身體が弱いと見えて腹の薄い處も一二ケ所あつたが、美聲といひ節廻しといひ申分なく堂々たる出來榮えは末恐ろしい、鮨屋（玉井松樂氏、絃、豐澤猿平）實にもう手に入つたもので、詞から節、情合といひ腹捌き迄自由自在の面白さ、柳（水戸部壽氏、絃、鶴澤鶴玉）充分な餘裕もあり、巧みもあつて、木遣り音頭など大受け、辨上（嘉喜村巴常氏絃、豐竹岬太夫）力演熱演は將に一陣の涼風を呼んで、滿場は破れるやうな拍手寺子屋（寶藏寺天昇氏、絃、竹本巴津昇）これなどすつかりもう一段と磨きも掛けられて、弛かな件迄行き届いた出來で、活け殺しも自在に近頃立派な所演であつた。

## 表紙繪說明

表紙繪は白石嘶の序幕『雷門』に出て來る『どぜう』文樂では三枚目頭といつてゐます。鼻がでんぐり返しうつので、鼻むけとも云ひます。アタマは赤の布でくるみ顏は正面だけ白粉ぬつた感じで白く塗ります。（しげを）

## 社告

前々より申上て置きます通り、御通知のない催しは兎角報道洩れになりますが、此儀不惡願ます。此頃更生淨曲協會の發會式が擧行されたやうですが、本社は協會より何等御通知に接しない爲め、讀者諸氏にその詳細の報道の出來得なかつた事は遺憾に堪えません。

民事
刑事
商事
特許事件
迅速懇切
に取扱ふ

前扶桑教權大教正
判事

辯護士
法學士　飛石久太郎

俳號　かなめ

東京市牛込區東五軒町五四
市電東五軒町停留場際
電話牛込98五七四七番

# ▽▽▽ 全國素義略傳 Ⅲ △△△

（イロハ順）

廣く日本全國といはず、遠く海外の素義名流略傳を掲載し、以てその藝歴その他を知り、後日のよき記念と致したく、本社は早くよりその編纂に着手致してをりましたが、多數の方々より非常な好評を博しました事に力を得て、今後共逐次掲載し、やがてはこの全國素義略傳を以て、全國素義大觀とならしめたく、何卒御免倒乍ら御投稿下さいますやう、御願ひ申上げます。

尙氏名の上部は俳名にて、次の質問に御解答を得たわけでございます。

（一）出生地（二）現住所（三）所屬又は會名（四）師匠名（五）始めた動機（六）修得年限（七）愛用する語物（八）餘技

## いろは　廣瀨慶次郎

（一）岐阜縣（二）淺草區雷門一丁目（三）綠會（四）豐澤團市（五）餘り大酒の爲に胃をこはしてより他になにか氣をまぎらすものなきやと思ひこの道に入り、同時に健康となる（六）三年半（七）志度寺毛谷村、逆櫓、布四（八）義太夫の他なし。

## 梅笑　赤尾七郎

（一）岐阜縣（二）四谷區新宿一丁目（三）良友會（四）豐澤良造（五）商賣柄運動不足になるので（六）十年（七）忠六、日吉、合邦、喜内、本下（八）骨董品。

## 都平　綿貫六助

（一）群馬縣（二）板橋（三）都連（四）竹本都太夫（五）家庭、親戚、義太夫の中で育つた結果と別に大いした動機はありません。（六）約三十年（七）宿屋、目下都太夫師により「酒屋」稽古中（八）劍道

## ときわ　堀德三郎

（一）奈良縣（二）淺草區雷門（三）聲義會、かなも字會（四）竹本柳太夫、鶴澤龜造、鶴澤豊造、初代竹本京枝（五）甘才前後胃腸病にて醫師に勸められて始む（六）三十年（七）野崎村、中將姫、堀川合邦、壺坂、安達、鳴門、柳（八）義太夫　方。

## たもつ　熊取谷安次郎

（一）大阪市（二）日本橋區本町（三）聲友會、竹韻會、かなも字會（四）鶴澤勇愛、團八、燕作、清一、米太夫（五）病身の爲（六）三十年（七）凡て世話物（八）演藝ものは全て愛好。

## 素遊　坂倉鐵哉

（一）岐阜縣（二）四谷區新宿一丁目（三）良友會（四）故鶴澤團翁、鶴澤燕作、豊澤良造（五）隣の友人が愛好してゐたので自然その道を愛す（六）十八年（七）鰻谷、逆櫓、合邦、喜内、又助、（八）趣味多し。

## 乃菊　乃村泰資

（一）高松市（二）本所區東兩國（三）佳照會、吉友會（四）大阪で竹本佐賀太夫、竹本佳照（五）震災後大阪へ避難、胃腸病であったので當時醫者から勸められて（六）十年（七）寺子屋、合邦、伊賀八、鮨屋、沼津、本下、忠六

## 福笑　松林丑三

（一）三重縣（二）芝區白金三光町（四）豊澤團八、團左衛門（五）大阪濱村喜雀氏にすゝめられて、（六）明治三十五年頃より（七）世話物（八）歌澤。

**語樂**　杉山熊吉

（一）東京（二）淺草區榮久町（四）竹本越太夫、豐澤扇八、鶴澤龜造團市、紘平（五）一十三才の時胃膓が惡かつたため、運動として始めたが、たう〳〵止められず今日に至る（六）四十年（七）語物は五、六十段あり（八）俳諧。

**語幸**　鈴木幸夫

（一）靜岡縣（二）荏原區小山町（三）津賀會（四）野澤語左衛門、竹本津賀太夫（五）趣味として始める（六）十四年（七）寺子屋、喜内、忠四、忠六、安達（八）なし。

**旭**　及川貢

（一）北海道旭川市（二）城東區龜戸町（四）豐澤松造（五）宮崎縣に居住せし時淋しさの餘り竹本八重登といふ師匠に玉三を習ひしが始め（六）十八年（七）鮨屋、岸姫、沼津、寺子屋。

**榮**　平井榮吉

（一）石川縣（二）淺草區千束町（三）招友會（四）鶴澤文造、豐澤松造、野澤道之助（五）病弱の爲友人にすゝめられ以來醫師にかゝらず（六）二十一年（七）赤垣彌作、杏掛、忠四、すしや。

**喜鶴**　久保田喜三郎

（一）埼玉縣（二）神田區和泉町（四）鶴澤鶴玉（五）故竹本朝太夫を聽いて義太夫が最高の音曲なるを感じてより愛好する（六）六年（七）酒屋、太十、壺坂、安達（八）鐵砲。

**龜鶴**　井上武一

（一）岡山縣（二）淺草區馬道町（四）豐澤健一郎、野澤道之助（五）十七才の時父親に勸められたるが動機（六）三十年（七）瀧百度平、儀作、四谷、本下、壺坂赤垣、沼津、油屋、酒屋、御所（八）芝居。

**みなと**　野口清次郎

（一）栃木縣（二）四谷區番衆町（三）良友會（四）豐澤良造（五）好きだから始める（六）七年（七）鮨屋、寺子屋、陣屋、太十、辨慶先代。

**司光**　嵐秀一郎

（一）大阪（二）大井元芝町（三）綾秀會（四）竹本小京、瀧太夫、和田綱八（五）健康の爲（六）大正十一年より（七）太十、瀧、忠三、合邦、陣屋。

**清芳**　笠原清一

（一）三重縣（二）日本橋區蠣殼町（三）芳聲會（四）豐澤芳太郎（六）十年（七）宿屋、野崎、紙治、日吉、本下（八）清元、小唄。

**清雀**　塚口仙太郎

（一）千葉縣（二）京橋區築地（三）鳥の會（四）鶴澤壽鳳（五）家庭圓滿の爲（六）五年（七）陣屋、太十、八陣、又助（八）撞球常磐津。


お　て　ん

天　樂

横雪の笹根岸上



芋屋の表裝

迅速叮嚀、お任せになつても御心配はありません。

本郷・菊坂

大經師　芋屋

清浦清一

## 太棹時評

# 古典藝術の精粹文樂座東上

## 七月一日より十七日間・明治座

◇…本年度最初の上京として、人形淨瑠璃大阪文樂座が、その全員を以て大擧上京、七月一日より十七日間毎日午後三時半開演で藝題五回替り、濱町明治座に華々しく、古典藝術の陣を布く事となつた。

◇…今回は折柄義太夫熱の上つた時とて、夏の惡い季節とはいひ乍ら恐らく非常な活氣を呈する事と思はれる。

◇…加ふるに、雜誌界に未だ　度も實現されなかつた文樂座藝術特輯號を以て、本誌太棹も不及乍らこの古典藝術普及の　助たらんとしたので、本誌の諸名家の研究論文を御參考に、充分文樂座を御觀賞あらん事をお推め申上げておきます。

◇…尙藝題は五回替りなれど、文樂座は上京以前にはつきりと藝題の確定はしないので、玆にはその第一回迄の藝題を發表しておく。

### 第一回藝題　日より四日間

生寫朝顏日記、明石舟別れ（呂太夫、叶、琴綱治）笑ひ藥（中、辰太夫、播路太夫。新太郎。奥、鍛太夫、新左衛門）奥座敷より大井川（切、土佐太夫、吉兵衛、琴、仙三郎）東海道四谷怪談、伊右門住家（中、相生太夫、清一郎。切、古靱太夫、猿糸）攝州合邦辻、庵室（中、和家太夫、重造。切、津太夫、綱造）勸進帳、安宅の關（辨慶、大隅太夫。富樫つばめ太夫、義經。南部太夫。伊勢、和泉太夫。駿河、辰太夫。片岡、播路太夫。常陸坊隅榮太夫。左忠太、宮太夫。番平、津の子太夫。絃　道八、仙糸、吉彌、芳之助、友衛門團次郎）

### 第二回藝題　五日より三日間

『菅原傳授手習鑑』車先（松王、呂太夫。梅王、辰太夫。櫻丸、小松太夫。杉王、津の子太夫。時平、和泉太夫。絃、叶）茶筌酒（大隅太夫、道八）喧嘩（和泉太夫、重造）櫻丸切腹（古靱太夫、猿太郎改メ猿糸）『日蓮聖人御法海』佐渡ヶ島塚原三昧堂（中、つばめ太夫、仙糸。切、津太夫、綱造、ツレ友衛門）『艶容女舞衣』酒屋（中、相生太夫、清一郎。切、土佐太夫、吉兵衛、琴、市松）『本朝廿四孝』十種香より狐火（切、綾太夫、新左衛門。後、南部太夫、吉彌、ツレ友衛門、琴、綱治）『京鹿子娘道成寺』鐘供養（シテ、小春太夫、ワキ、つばめ太夫、相生太夫、ツレ播路太夫隅榮太夫、津摩太夫。絃、芳之助、重造、清一郎、團一郎、道造、仙三郎、友三郎、猿一郎、重次郎）


御禮

謹啓陳者小生儀昨年三月彼地有志の招聘により渡米、約一ケ年餘在住邦人に稽古致し居候處幸に聊かの瑕瑾もなく期間終了、去る六月十九日無事歸朝仕候、就ては倍舊の御懇親の程奉希上候先は右不取敢御挨拶まで

敬具

東京市日本橋區芳町　丁目四番地

豐澤仙十郎

電話茅場町一九三五番

## ◆國民新聞社主催淨瑠璃祭

### 多彩・絢爛の繪卷

青葉薫る初夏の帝都を斯界最初の崇嚴なる淨瑠璃祭は、國民新聞社主催によつて、六月八、九兩日午前十一時より、日本橋倶樂部に於て開催された。

第一回は神田明神宮司祭主となつて、「七功人」の尊像の祭壇に向つて、先づ迎魂の式が擧げられ、同社主筆長谷川光太郎氏を祭典委員長として、續いて中澤巴、星野桔梗、吉田三芳、伊藤松鶴、鈴木松寶、勝田勝雨、寶藏寺天昇の諸氏よりなる委員を始め、滿場起立の中に祭典は嚴かに執行され、續いて十一時より次の通り、淨瑠璃祭記念演奏會は開かれた。

斯かる試みは殆ど本邦最初の祭典とて、聽衆は朝來より詰め掛け　流玄人連も參詣して、近頃華かな會であつた。

尙寄贈としては、花輪が大日本淨曲協會、巴津天會、中澤巴竹本伊達子よりあり、藥玉、鏡餅その他供物全部は鈴木松寶、大日本因會及び小林和舟の諸氏より供物などが目をひいてゐた。

この種の義太夫會を、一流新聞社が主催する事は、殆ど近來なかつた所で、青葉の候、古典藝術復興の時、東都素義界の充分誇となるべき堂々たる會であつた。

尙、同社の演藝欄は、從來閑却され勝ちな、義太夫欄を新設して大いに讀者層擴大を覘ひ、この所非常な好評を博してゐる。

一日間の出演者、語物は左の通りである。

（八日）新口村（都昇、都太夫）忠四（筑波、團八）十種香（朝章、猿平）寺子屋（乃菊、佳照）酒屋（呂壽、綾秀）合邦（松樂猿平）十種香（司聲、司好）新口村（錦志、岡三）近八（義雀雷助）志度寺（華笑、勝鳳）又助（吳羽、猿三郎）忠六（壽瓢綾秀）寺子屋（美尙、美之助）先代（沖、猿藏）野崎村（清、道之助）帶屋（さくら、粂造）先代（武藏、團市）妙心寺（松雨、猿之助）壺坂（美鳳、津賀昇）寺子屋（瓢六、時之助）酒屋（美峰、猿之助）鮨屋（三芳猿三郎）

（九日）柳（司、猿女）重の井（里芳、勝助）八百屋（生昇、彌玉）帶屋（春和、道之助）先代（白井清華、猿三郎）中將姫（近江清華、寛三郎）安達（松鶴、猿之助）重の井（六花、紘平）鰻谷（素遊、良造）陣屋（越巴、廣助）揚屋（壽、鶴玉）中將姫（和舟、紘平）先代（葵、良造）岡崎（つばめ、伊達子）宿屋（美昇、文之助）赤垣（源、良造）紙茶（銀水、猿藏）炬燵（たもつ、燕作）忠九（武市、猿三郎）合邦（關路、猿三郎）近八（天昇、巴津昇）

## ◆秋本雲雀追善義太夫會

六月一日午前十　時より並木倶樂部に於て、秋本雲雀氏追善義太夫會が開催された。

主催は東都聲義會で、語り手にはお歴々が集つてしめやかな追善義太夫を語つて、故人の靈を慰めたが、その美しい友誼的の現れは、まことに立派なもので、會場樂屋共しめやかな中に非常な大盛況であつた。讀經後

番組は左の通り。

初手向、引窓（ひばり、紘平）壺坂（浪補、國市）廿四孝（葵良造）先代（武藏、團市）合邦（冠之、勝八）忠六（壽瓢、綾秀）逆櫓（花遊、播代）太十（喜聲、勝八）寺子屋（叶、新次郎）辨慶（松樂、猿平）挨拶（本城冠之）忠四（武市、湊太夫）帶屋（たもつ、燕作）酒屋（ときわ、道之助）すしや（永樂、和光）戀十（六花、紘平）合邦（銀水、猿藏）安達（里芳、勝助）辨慶（吳羽、猿三郎）日蓮記（和風、團七）野崎（和舟、紘平）

尙これを機會として、今後東都聲義會を復活して華々しく公演しようといふ事になつた。

## ◆五十義會大關並に入賞祝賀會

第廿三回東都五十義會春季大會に、兩大關及び入賞された方々に依つて、祝賀義太夫會が、六月七日夜、大森松淺本店に於て華かに開催された。

主催者は、關路、春和、清、瓢六の四氏で、演奏を終つて宴に移り、十時過ぎ解散、出席者は素義玄人の第一線の方々の顏が多數見られ、中にも美妓が六七十名も交つての華かな祝賀會で、誰かの、これはまるで長唄の會だといつた程、頗る綺麗な聽客で、目出度く祝ひ納めた。

毛谷村（瓢六、時之助）合邦（清、道之助）寺子屋（さかえ彌榮吉）松王邸（清司、雷糸）忠四（筑波、道之助）忠七（由良之助、つばめ。おかる、千鶴重太郎、末成。彌五郎、伴內、紅司。喜太八、美昇、九太夫、關路、力彌、湊。平右衛門、春和）紘（香伯）

## ◆五聲會例會

六月十日夕、神田錦橋閣に於て、第二百四十回五聲會例會が開催され、例の通り非常な滿員であつた。

梅由（旭、猿平）和田兵衛上使（千里、猿藏）沼津（松樂、猿平）堀川（三芳、猿三郎）合邦（聲鳳、吉作）阿古屋（阿古屋、聲鳳。重忠、鏡太夫。岩永米太夫。榛澤、巖太夫。紘、吉作。ツレ、猿七、三曲、猿三郎）

## ◆竹本佳照會

六月十九日四時半より飛行館に於て、第五回竹本佳照會が開かれ、近頃この會は女義中でも仲々精進してゐる事とて、會場は立錐の餘地もない盛況であつた。

鈴ヶ森（佳世子、佳由）日吉三（佳由、佳晴）酒屋（貴多子清子）宿屋（佳晴、仙貴美）柳（駒龍、駒登久）太十（越道、猿昇）野崎（素八、素衛門）鮨屋（越駒、紘敎）鰻谷（素昇、巴佳）先代（佳照、清一）大切小唄振、銀座ながし、お染（下谷、勝丸）柳の雨都をどり（下谷、鶴千代）

## ◆鳥の會（第五回）

鳥に因める雅號の方々の集ひで、その第五回が六月廿八日午後六時より有樂町電氣倶樂部で開催された。

陣屋（清雀、壽鳳）鰻谷（山鳥、伊達子）引窓（つばめ、香伯）櫻丸切腹（千鶴、壽鳳）沼津（いてふ、燕作、ツレ清子）

# 各地通信 POST

## 羅府

豐澤仙十郎

### ▽送別義太夫會△

私が一應歸目致さねばならない事になりましたので、ロスアンゼルスの豐仙會主催で、送別大温習會が、五月廿五、六日の兩夜、當市大師教會堂に於て開催されました。これで當分のお別れかと思ふと、惜別の情はまたひとしほでございましたが、兩夜は恐らく當市始つて以來といふ大盛況の活氣でございました。

（廿五日）又助（勲）妙心寺（一三）鈴ヶ森（龜好）壺坂（文正）合邦（都の子）山名屋（都）沓掛村（信濃）御殿（千歳）新口村（千里）鈴ヶ森（繁子）野崎（初子）

（廿六日）安達（寶來）野崎（素好）太十（しげる）酒屋（愛昇）志度寺（轡）御殿（正調）八陣（鶴勝）鮨屋（忠兵衛）又助、德壺坂（百合子）揚屋（文子）絃（仙十郎）補助（錦糸、小柳、清子）

## 宇都宮

佐伯秀哉

### ▽竹本都雀會△

竹本都雀會が去年組織されてから、當市の義太夫界は加速度的に熱が上り、毎月例會を催す毎に、次第にファンの增大する所となりそれに都雀師が花柳街の江野町へ移つたので段とまた熱が上り、六月十五、六の兩夜、江野町の鑛泉館に於て催された例會は宛ら大會のやうな盛會でした。

（十五日）太十（語巧）奥（貴昭）玉三（豊國）廿四孝（〇）合邦（麿澄）

（十六日）辨慶（豊國）新口村（貴昭）松王邸（清鳳）酒屋（麿澄）先代（一〇）

## 太棹ニュース

◆岡崎円六女史の愛孃政子さんは京都の染料店竹谷氏の三男三郎氏と五月十七日に目出度華燭の典を擧げらる。円六女史は廿九日歸京、新橋の『くらま會』は、その第七回を六月十一日夕より帝國ホテル演藝場で開催された。義太夫では毎回保坂有曲、吉田美地句の兩氏が出演して、長唄、清元、哥澤などの中に交つて光彩を放つてゐるが、今回も有曲氏は『堀川』絃（猿平、ツレ、猿若）美地句氏は『合邦』絃（猿平）で、例に依て何も彼も吹つ飛ばしてしまつた。

◆寶藏寺天昇氏は誕生祝ひとして祝賀義太夫會を六月廿五日文化倶樂部で東都義太夫界の床世話係全部を招いて、曾我對面、忠三、忠七などを掛合で語らせ、氏は切前で『忠四』を語り、終つて酒宴に移り、大振舞ひの賑かな催しに一同歡を盡して散會した。

◆六月十日善行寺參詣團體に加入して、同地の田中和國氏の膳入で長野産業會館で義太夫會を開催し、非常な盛況を極めた野澤道之助連は十一、十二の兩日木下松玉氏經營の淺間松玉館に宿泊の上、松本鶴聲閣で華々しく開催。各々得意の喉で聽衆を唸らせた。同行者は春和、銀司、松玉、鶴竹、筑波の諸氏、なほ長野の語り物は儀作（喜鶴）彌作（榮）和國氏挨拶。先代（銀司）忠七掛合（由良の助、筑波）（おかる、一見）平右衛門（春和）

◆竹本相模太夫は木村さかえ氏の後援に依り木挽町木村屋別館を稽古所として毎日出張してゐるが、御遠慮なく皆様の御來遊お稽古を待つとの事。

◆笠原清芳氏は、六月十六日日本橋倶樂部で開催された三重縣の縣人會に出席、種々餘興の中に『裏門』を豊澤芳太郎の絃で語り好評を博した。

◆渡米　年有餘在米邦人の同好者に稽古をしてゐた豊澤仙十郎は、六月十九日目出度歸朝。

◆神馬里芳女史の發企にかゝる深川成田不動尊の燈籠獻納は六月廿　日から工事に着手。東都素義連名の申込みも既に百名に達するさうである。

◆和田春和氏は伊藤仁太郎氏を會長とする話術研究會にて、去る廿七日梅本香伯氏の絃で『玉三』を語り、義太夫としての話術研究を示した。

◆大日本淨瑠璃義太夫協會の更生は社團法人大日本淨曲協會?と改稱し此頃その發會式が擧行されたやうだが、通知に接せず乍殘念詳細は不明。

## 編輯後記

◇…太棹第六十六號をお送り申上げます。豫告致しました通り、本號は殆ど全誌面を擧げて、文樂座研究特輯號と致しました。本社と致しましては、近頃快心の編輯と存じます。何卒隅から隅迄御愛讀の程願ひ上げます。

◇…本號より表紙を變へました。漫畫界の鬼才、文樂座研究家宮尾しげを氏に依つて、逐次珍しい人形頭を以て飾りたく、本號文樂座研究特輯號を以て第一回に、時々御執筆願ふ事になつてをりますから、何卒御期待下さいまし。

◇…續いて安藤鶴夫、齋藤拳三、綿貫六助、小泉蛙鳴の諸先生方が、日頃の蘊蓄を傾けられて、文樂座研究論文を御寄稿下さいました他に、劇文壇の諸名家よりも御解答を賜りました事は、錦上更に花を添える事となり、御多忙中御寄稿下さいました諸先生方に誌上を以て厚く御禮申上げます。

◇…尙本號はかうして特輯號と致しました關係上、御好評を賜りをります、金王丸氏の「ラヂオ評」及び「質疑應答」「餘舞語吐」「素義風流線」「稽古見臺」は休載仕り、次號には華々しく捲土重來の勢を以て掲載致します故、これ亦御期待下さいますやう。

◇…太棹社はお蔭を以てこの處本誌上も從來と面目　新して、面白い讀物を掲載し、非常に好評を以て迎へられてをりますので、益々東都唯一の義太夫機關雜誌としての責任も重く、號を追ふ毎に逐次新しい計畫のもとに、新編輯を御覽に入れようと、目下その準備中であります。

◇…また本社主催の東都義太夫會と淨曲振興會も回を重ねる毎に盛況を呈しをりますのは　重に御後援諸家の賜と厚く御禮申上げますと共に、今後共　層の御援助の程御願ひ申上げておきます。

◇…御心配をお掛け致しました荆妻三久子儀退院後、未だはか〳〵しからず、爲に「巡禮記」も掲載延期となりましたが、來月からは再び巡禮さして頂きます。

◇…そろ〳〵盛夏が近づきます。皆様の御健康を祈上げると共に、本社についての御希望はどし〳〵御申越下され、皆様の義太夫雜誌としての太棹を御愛讀下さいますやう重ねて御願ひ申上げておきます。(芳河士生)

## 本誌後援名譽會員

（イロハ順）

（東京之部）

須賀一鳳氏　高島一廣氏　廣瀬いろは氏　岡崎円六氏　吉川浪補氏　平野ろ昇氏　松本春子氏　嘉喜村巴常氏　北島北斗氏　平田平和氏　中澤巴氏　竹内とをる氏　安藤どくろ氏　吉田登盛氏　藏田都鳥氏　堀ときわ氏

安藤都昇氏　保々長平氏　福田柳蝶氏　神馬里芳氏　本木大熊氏　鈴木和樂氏　小林和舟氏　本多可笑氏　大和田可笑氏　飛石かなめ氏　紺我笑氏　竹内たもつ氏　松尾武市氏　大用大嘉津氏　田口辰壽氏　疋田大龍氏　井上巽氏

金井辰稻氏　乃村素弘氏　片山つばめ氏　宮本武藏氏　萩原うつぼ氏　矢富靱氏　乃村乃菊氏　高野昇氏　中野吳羽氏　本城冠之氏　國井やまと氏　瀧脇まつば氏　加藤福勝氏　鈴木兒雀氏　是澤悟園氏　田中廣笑氏　水戸部壽氏　松岡語松氏　杉山語樂氏　寶藏寺天昇氏

島田天賞氏　大築葵氏　松本朝章氏　及川旭氏　大塚三鳳氏　寺岡三幸氏　波多野三樂氏　木村さかえ氏　細川清氏　金田金鳳氏　井田菊泉氏　菊地錦志氏　川奈部銀司氏　秋山ゆたか氏　岩田末成氏　佐野美昇氏　小黑美玉氏　高瀨操氏　二ッ木美登利氏

吉田美地句氏　横井三由氏　鈴木松寶氏　玉井松樂氏　菊地秋月氏　平井壽樂氏　秀　秀峯氏　山田壽瓢氏　伊藤松猿氏　武笠亮宏氏　高品一重氏　松岡茂里雄氏　白井清華氏　近江清華氏　湯原清司氏

（地方之部）

米國平野一昇氏　同武榮玉氏　同杉山陶岳氏　同武田德昇氏　同兼廣廣玉氏

同西本西紫氏　樺太宮下杉鳳氏　足利福田都氏　米國細田眞玉氏　靜岡村岡壽樂氏

## 新名譽會員

岡崎円六氏
杉山語樂氏
金井辰稻氏
木村さかえ氏
堀　ときわ氏
松岡茂里雄氏

右の諸氏今回本社後援名譽會員御快諾を賜り難有奉深謝候

太棹社


定價

| | | |
|---|---|---|
| 一部 | 金三十錢 | 郵稅二錢 |
| 六月分 | 金一圓八十錢 | 郵稅共 |
| 一年分 | 金三圓 | 郵稅共 |

廣告料

| | | |
|---|---|---|
| 普通 | 一頁 | 金貳拾圓 |
| 特別 | 一頁 | 金參拾圓 |

六月號（毎月回發行）

▼記念寫眞掲載料は　頁金拾五圓申受ます
▼誌代は總て前金御拂込の事
▼なる可く振替に御送金の事
▼郵券代用は一割增但一錢切手の事

昭和十年六月廿五日印刷納本
昭和十年六月廿七日發行
東京市小石川區音羽二丁目一四
編輯兼發行人　富取壽鹿
東京市牛込區早稻田町五八
印刷人　栗原榮松
東京市牛込區早稻田町五八
印刷所　栗原印刷所
東京市小石川區音羽二丁目一四
發行所　太棹社
振替東京三一七八五番

# 簡易レコード吹込元祖

★目下大流行のレコード吹込みに種々なる弊害ある事を遺憾とし今般私方では優秀なる電氣吹込機械（チャンピオン式）と『レコード原盤』最新式を製作致しました。

一音量　大會社のレコードと同様です
一音質
一使用度數
一時間　兩面凡九分迄の準備あり
一代金貳圓五拾錢

出張は五枚以下は別に壹圓頂戴致します。
機械による不完全なる吹込みに御不滿の皆様方にも「私方のレコード吹込み」を御薦め申上げます。

電氣吹込機械製作業　大正五年創

中央商會

吹込元祖・淺草區壽町一ノ七ノ二



# 円六

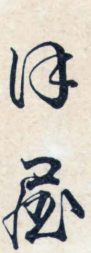
九段下の名物
電話九段二〇五一番

すつぽん椀なら江戸前蒲燒なら
御宴會は大勉強すべて安値に

關西料理

風流・金ぶら・茶漬

【美地句】



新橋二ノ八
電銀二〇八

昭和十年六月二十五日印刷納本
昭和十年六月二十七日發行（毎月一回發行）
太棹（第六拾六號）
（定價 金參拾錢）

醫療用
齒療用 治療界の寵兒!!

於各大博覽會
賜優良國産金盃賞牌多數

M.D.N.
印

本木注射針

俳號 本木大熊

東洋に於ける斯界のパイロット!!

製品種目

醫療用
齒療用
超不酸化鋼製
不酸化鋼製
引拔鋼化鐵製
英國最優鋼製
白金製
十八金製
ニッケル製

東京市瀧野川區中里四四七
本木注射針製作所
所主 本木梅治郎
電話水石川(85)一四三七番
出張所 東京市本郷春木町二ノ五
電話水石川(85)三四一〇番
研究所 千葉縣君津郡富岡村田川